

目次

第13回大会開催案内

近代幼児教育史研究会を振り返る

『近代幼児教育史研究会会報』編集について

……………都築邦春

再録 近代幼児教育史研究会の改組にあたって（会報1号）

……………岩崎次男

再録 「近代幼児教育史研究会」を振り返って（会報78号）

……………阿部真美子

新入会員・会員異動

寄贈図書

事務局からのお知らせ

第13回大会開催案内

第13回大会は2017年12月9日（土）に東京大学で開催いたします。

東京大学大学院教育学研究科は、乳幼児の発達や保育・幼児教育の実践、そのための政策に係る研究を推進する「保育実践政策学」という新たな統合学術分野の確立をめざして、2015年7月に発達保育実践政策学センター（Cedep）を創設しました。Cedepでは養育と保育の質の向上を目指して、研究を推進してその成果を発信するとともに、シンポジウムやセミナー等を開催してきました。第13回大会のシンポジウムは、Cedepとの共催で、スウェーデンからグニラ・ダールベリ氏（ストックホルム大学名誉教授）をお迎えして開催します。

翌日の10日（日）には、恒例の愉フォロ会（海外の幼児教育史の研究動向を愉しみながらフォローする会）が開催されます。ぜひ、あわせてご参加ください。

プログラムは10月に発送する予定ですが、最新の情報は学会ホームページで適宜お知らせいたします。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

（第13回大会実行委員：浅井幸子）

開催要項

1. 期日：2017年12月9日（土）
2. 会場：東京大学（研究発表は山上会館、シンポジウムは伊藤謝恩ホールで開催予定）
3. 日程（予定）
 - 9:00～ 受付
 - 9:30～13:00 研究発表
 - 14:00～16:30 シンポジウム
 - 16:45～17:30 総会
 - 18:00～20:00 懇親会
4. シンポジウム
 - テーマ：後近代の保育・幼児教育改革（仮）
 - 提案者：グニラ・ダールベリ（ストックホルム大学名誉教授）
 - 指定討論者：太田素子（和光大学）、秋田喜代美（東京大学・Cedep）
 - 司会：梶瑞希子（聖徳大学）

趣旨説明

スウェーデンの保育政策は、OECDによって政策のロールモデル国として高く評価され（OECD2006）、ユニセフからも「世界で最も発展したシステムの一つ」（UNICEF 2008）として評価されています。その特徴は、幼保一元化および幼小接続と、両性による子育てを支える育児休業制度の実現にあります。

1995年には、親から入学希望が出されたら3ヶ月以内に入学を保証する義務が自治体に課されました。また父親が取らなければ消滅する育児休業が制度化され、就労と育児におけるジェンダー平等に寄与しています。さらに1996年には、公的保育を教育システムに組み込むかたちで幼保一元化が実現され、1998年には6歳児を対象とする就学前学校クラスと、ナショナル・カリキュラムが導入されました。

ダールベリさんは、ナショナル・カリキュラムが定められた際に、その起草に参加し、レッジョ・エミリアの幼児教育に学びつつ、従来の「自然成長論」および「文化と知識の再生産者としての子ども」観に対して「文化と知識の創造者としての子ども」観を提示しました。その影響はスウェーデンの国内に留まるものではありません。ピータ・モス、アラン・ペンスとの共著『「保育の質」を超えて（Beyond Quality in Early Childhood Education and Care）』は、レッジョ・エミリアの幼児教育を参照しつつ「保育の質」の議論に問いを投げかけ、10カ国以上で翻訳されています。

スウェーデンでは一連の保育・幼児教育改革が、どのようなポリティクスの中で、そしてどのような哲学のもとで進められたのでしょうか。このシンポジウムでは、ダールベリさんの提案を中心に、後近代の保育・幼児教育改革の展開を考察したいと思います。

5. 参加費・懇親会費（前納方式は採りません。受付でお支払いください）

参加費：会員・非会員 1000円（院生は無料）

懇親会費：会員・非会員 5000円（院生は3000円）

6. 研究発表の申し込み

(1) 申し込み方法

同封の申込書（学会HPからもダウンロードできます）に必要事項を記入の上、9月4日（月）までに、電子メールまたは郵便（消印有効）にて学会事務局へお送りください。電子メールの場合のみ、数日以内に到着確認のメールを返信します。

郵送先：〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1 お茶の水女子大学 小玉亮子研究室気付 幼児教育史学会事務局

メール：admin@youjikyokushi.org（学会事務局）

(2) 発表資格

一般会員：申し込み時に年会費を納入済みのこと。

新入会員：申し込み時までに入会手続きを終え、年会費を納入済みのこと。

(3) 発表時間

一人（1グループ）あたり30分（質疑応答5分を含む）を予定しています。

発表数によって変更する可能性もあります。ご了承ください。

(4) 発表受付手順

学会事務局で申し込みを受領した後、理事会にて発表内容を検討し、メールで連絡いたします。その結果、数の調整のために、個別に相談する場合がございます。

7. その他

(1) アクセスについては東京大学のHPをご覧ください。本郷三丁目駅（地下鉄丸の内線、都営地下鉄大江戸線）から徒歩8分です。

(2) 12月9日（土）の昼食の準備はありません。生協や近隣のお店で各自おとりください。

(3) 懇親会は大会会場の近隣を予定しています。当日ご案内します。

<関連企画>

愉フォロー会（海外の幼児教育史の研究動向を愉しみながらフォローする会）

日時：12月10日（日）9:30～12:00（大会翌日）

会場：東京大学本郷キャンパス 赤門総合研究棟210教室

内容・報告者：未定

<問い合わせ先>

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院教育学研究科 浅井幸子研究室気付 幼児教育史学会第13回大会実行委員会

電話：03-5841-4881（浅井研究室直通）

メール：asai@p.u-tokyo.ac.jp

近代幼児教育史研究会を振り返る

『近代幼児教育史研究会会報』編集について

都築邦春（『近代幼児教育史研究会会報』第2代編集担当）

私が『近代幼児教育史研究会会報』に携わったのは、6号から55号までです。私の前は増井（三夫）さんが編集をしていました。近代幼児教育史研究会は、科学研究費による研究が会の発端であると聞いています。（その間の経緯については会報1号の岩崎次男先生の文章と会報78号の阿部真美子さんの文章を参考にしてください。）

埼玉大学に幼児学科ができたとき、この研究会は実質的に始まったように思います。フレーベルの研究をとおして幼児教育に関わっておられた岩崎先生を中心に会は発足しました。初期の会員は、岩崎先生の知人が中心でした。会報の編集委員は、岩崎次男、林信二郎、古沢常雄、増井三夫、阿部真美子、榊瑞希子、別府愛、都築邦春であったと思います。増井さんは、数年で小樽商科大学に就任されたので、編集から離れて行かれました。

そのような状況の中で、私が編集に関わった頃のことを書いてみます。編集は主に岩崎、林、阿部、榊、別府、都築の6人で行いました。編集の日は、岩崎研究室に集まり、会報の方針、執筆依頼、研究会の時期、会場、発表者の選定・依頼などを決めて、1回目の打合せは終わりました。原稿が集まると構成を決め、45号までは「躍進社」に原稿を持ち込み、印刷を依頼しました。46号から55号までは、私がパソコンで執筆者からいただいたデータを取り込んで編集しました。執筆者の原稿が手書きの場合は、私が入力して編集しました。会報の全体構成は、4号までのものを参考にしました。

印刷が終わると、宛名ラベルの作成、会費納入状況の確認、郵便振替用紙、会報を封筒に入れて郵便局に持ち込み、料金別納で埼玉大学近くの大久保郵便局で発送しました。会報の発送には、林研究室の学生さんにも手伝ってもらいました。会報は年3回、およそ16年間携わったと記憶しています。発行部数は、初期は50部から、後半は100部近くになりました。

会報の発行で大変であったのは、自分で会報を印刷するようになってからです。当時、私は「一太郎」でもっぱら文章を作成していましたが、ワードやその他のワープロ原稿を受け取ったとき、その変換で苦労しました。私が使っていたパソコンはNECのデスクトップで、立ち上げるのに時間がかかったうえ、コピーなどの作業はパソコンに全部指示をしないとコピーできませんでした。そのときのパソコンは、1台35万円くらいで、ハードディスクが2MBのもので、20万円しました。現在、2GBでも500円くらいですし、2TBでも2万円もしないくらいです。

ただ、自分で入力し、印刷するようになって、編集を途中で変更することができることと、原稿のメ切日の調節ができるようになりました。最初のうちは、「一太郎」の明朝体もなめらかにできず、随分読みにくい会報になりました。

もう一つ苦労したのは、宛名です。最初は、横一列に印刷した住所録をカッターナイフで切って封筒に貼りましたが、12枚の宛名ラベル用紙に印刷できるようになり、かなり楽になりました。最終的には、21枚のラベル用紙に印刷できるようになり、能率がよくなりました。

会報の編集に携わったおかげで、美術教育と美術にしか関心のなかった私が、幼児教育や教育について考えることができるようになりました。美術教育を、美術を教える教育としてではなく、美術を通しての教育と考えるようになったのは、研究会で幼児教育、教育の優れた研究者に接す

ることができたお陰であると感謝しています。

56号から78号までは、梶さんが新しい事務局のスタッフとともに、素晴らしい会報を編集されました。そして、研究会は宍戸健夫先生を会長として、学会に発展しました。私が岩崎先生を中心とする事務局の方々と会報を編集したのは、研究会が発足し、充実していった時期であったと思います。

「近代幼児教育史研究会」が、「幼児教育史学会」になって、「幼児教育史学会会報」も一層充実しているように思います。幼児教育の充実のために、「幼児教育史学会」の一層の発展が望まれます。

2017.5.19

再録 近代幼児教育史研究会の改組にあたって

世話人代表 埼玉大学教授 岩崎次男

近代幼児教育史研究会は、女性の研究者を中心とするささやかな研究サークルとして出発した。そこでは、ようやく本格的に幼児教育史の研究にとりくむ研究者が出現してきたことを背景に、幼児教育史研究の情報を交換し、文献・史料を集積しようということが意図された。2年前から文部省の科研費補助が与えられることになり、それを契機に20数人のメンバーを擁する近代幼児教育史研究会が結成された。それは科研費研究分担者とこれを助ける大学院研究者からなるものであり、どちらかといえば、閉鎖的なものであった。

この研究会は年2、3回公開研究発表会を催し、会誌「近代幼児教育史研究」を発行してきた。とりわけ、この会誌第3号の「世界近代幼児教育史の研究」は、この研究会のこれまでの研究成果の総決算ともいえるべきものである。また、近く、明治図書からこの研究会によって「近代幼児教育史」が発刊される予定である。このように、これまでの近代幼児教育史研究会は一応の成果を収めてきた、と確信している。

ところで、これまでも、近代幼児教育史研究会の閉鎖性が限界として感じられ、また部外者の研究会参加の希望が申し出られたりもした。そのため、たとえば、この研究会の開催する研究発表会を公開とし、それに部外者の発表参加をお願いするという形をとってきた。この度、文部省の科研費補助の終了を迎えて、近代幼児教育史研究会をどうするかが討議され、その結果、それを存続し、そのメンバーを科研費研究の分担者に固定することなく、幼児教育史研究に関心をもつ多くの人々の参加を求めようということが決まった。その場合、近代幼児教育史研究会の事実上の生みの親であった立教大学教授・長尾十三三博士にはひきつづき御指導と御助言を頂く予定であり、公開研究発表会は年2回、交流と学習と研究成果の発表の場所として開催しつづける予定であり、さらに会誌「近代幼児教育史研究」は研究会メンバーの研究成果のささやかな発表場所として今後もなんとか存続させたいと願っている。

近代幼児教育史研究会は、明日のわが国の幼児教育はどうあるべきかという問題意識の下に、幼児教育の歴史的研究にとりくむ。したがって、それは今日の幼児教育に直接接つながっている近代幼児教育の歴史的研究を中心とする。そこでは、世界史的あるいは比較史的立場から幼児教育史が考察される。また、制度としての幼児教育と習俗としての幼児教育が問題とされる。さらに、政策と運動の観点から幼児教育がとらえられる。さらにまた、事実としての幼児教育と思想としての幼児教育が考察される。また、幼児教育がその原理の考察にとどまらず、その内容及び

方法の具体にまでわたって検討される。さらにまた、幼児教育を支えている発達観や児童観が問題とされる。…要するに、近代幼児教育史研究会は、民衆の子どもの立場に立つことを共通の基本的研究姿勢とし、この姿勢の下に各メンバーの自由な研究を尊重しつつ、その交流と相互批判をうながし、その成果を集約し、近代幼児教育史の全体像を明らかにすることを直接の課題とし、もって明日のわが国の幼児教育のあり方の探究に寄与することを期する。

このような経緯と趣旨を御了承下さって、多くの方々が近代幼児教育史研究会に御参加下さることを期待している。

(1978年6月14日発行『近代幼児教育史研究会会報』第1号より転載)

再録 「近代幼児教育史研究会」を振り返って

山梨県立大学 阿部真美子

近代幼児教育史研究会が幕を閉じる運びとなった。本号が最終号である。研究会発足にかかわり、その後約30年の活動期間において事務局の一員という立場にあったことを考えると、研究会の果たしてきた役割とともに、学会への転換までの大凡の経緯について振り返る責務から逃れられないであろう。微力な私には重すぎるが、とにかく雑ばくな形ででもまとめてみたい。

1974年頃になろうか。東京教育大学大学院教育学研究科に幼児教育史をテーマとする一つの演習が開講された。教育学の教育課程において幼児教育史が開講されたのは、その大学院ではおそらく初めてのことだったと思う。その担当者が、フレーベル研究者として知られた岩崎次男先生（当時埼玉大学）である。当時の大学院では、幼児教育や幼児教育史研究はマイナーな研究分野だった。私が在籍する外国教育史研究室では、ドイツやフランスなど先進的近代国家における教育の思想・理論、政策、制度を中心とする研究が盛んであった。そのような状況下で肩身の狭い思いでいた私にとって、まさに朗報であった。この演習をきっかけに、幼児教育史の研究会をつくろうということになった。同じ大学院の後輩、山口一男、別府愛、榊瑞希子、嶺井明子氏が、次々と賛同してくれた。更に、埼玉大学の林信二郎、都築邦春氏も加わり、岩崎会長のもと「近代幼児教育史研究会」を発足。全国に会員を募った結果、この分野の優れた研究者が集まっただけでなく、徐々に若い研究者の方々も加わり、最終的には100名近い会員数となった。それまでも歴史ある「日本保育学会」を中心に、幼児教育や幼児教育史の研究成果の発表機会が提供されてきているが、ある程度の規模を持つ、幼児教育史と銘打った全国規模の研究会としては、最初のものではないかと思う。

この間、研究会は、年1回の研究発表会と総会を開催、年3回の会報を発行してきた。更に会誌『近代幼児教育史研究』（第1号～第9号）を発行し、会報と会誌は国立国会図書館を始め数カ所の研究機関に寄贈を行ってきた。会報には、会員への事務的な情報伝達以外に、研究発表会の発表要旨、会員の研究情報、海外の幼児教育情報や新刊図書紹介などを掲載してきている。

研究においては、フレーベルを初めとする著名な思想・理論研究や幼児教育の啓蒙運動、養成、実践史、制度・政策史という研究蓄積が見られた。2回の科研費補助金をえた。『近代幼児教育史』（明治図書1979年）と『幼児保育制度の発展と保育者養成』（玉川大学出版部1995年）は、その成果である。

さらに、教育概念を学校制度から拡大し、地域社会や家族の営みとする視点の研究や、これまであまり明らかでなかった国の幼児教育史の研究成果も出されるようになったことは、注目すべ

き点であろう。また、日本の幼児教育史研究が、一次資料によって研究成果を出してきているのと対照的に、外国対象のものは一次資料に基づく研究成果があまり出されてきていなかったが、一次資料に基づく研究成果や社会科学の近接領域の研究成果を取り込む研究も出現しつつある。これは、研究に於ける質的な発展を示していると思う。

さて、幼児教育への認識について、30年前と比較すると、その社会的有用性や人権が強く認識されてきたことであろう。少子・高齢化、子育て不安等の育児環境の悪化等の社会背景とかかわって社会政策的な認識の高まり、子どもの権利条約の批准、そして乳幼児に対する自然科学・社会科学の学際的研究の発展が見られる。こうした変化の一方で、教育学における歴史研究者層が激減してきたことと相俟って、幼児教育史研究も同様の傾向が見られる。また、養成課程（教職や資格）において歴史と付く科目名称が激減し、幼児教育の研究室がある大学院は少なく、研究の継続自体が容易ではなくなりつつある。そうした状況を受け止めるには、研究会という形では限界が大きい。若い会員の将来にとって有意義な研究成果を創出する場として、学会再編を選択した。さらには、幼児教育史という領域においてどのような研究を出していく必要があるのか。このような研究への根源的問いについて切磋琢磨する場として、学会への道を選択したものと思う。

学会は、12月10日の総会から本格的にスタートする。宍戸健夫会長、湯川嘉津美事務局長など、新たな運営体制のもと準備と当面の基盤づくりに取り組むことになる。研究会から学会への再編は、総会や会報を通じて会員に図った上で決定されたことである。それとは別に、研究会の誕生を願い、尽力いただいた方々に報告をしなければいけなかったのだが、それができないまま今日に至っている。この紙面を借りて感謝とお詫びを申し上げたい。

(2005年9月6日発行『近代幼児教育史研究会会報』第78号より転載)

* 再録にあたっては、事務局で原稿の入力作業を行い、誤字とみられる箇所は訂正した。

新入会員・会員異動 (省略)

寄贈図書

近藤幹生・塩崎美穂『保育の哲学3』ななみ書房、2017年。

小玉亮子（編著）『幼小接続期の家族・園・学校』東洋館出版社、2017年。

事務局からのお知らせ

1) 役員選挙のお願い

別紙にある通り、このたび幼児教育史学会第5期役員選挙を行います。ご投票よろしくお願ひします。

2) 会費納入のお願い

本学会の会計年度は10月1日から翌年の9月30日までです。今回、振込用紙は、会費納入状

況を確認のうえ、第12回大会年度（2016年10月1日～2017年9月30日）とそれ以前の年度の会費が未納の方にお送りしております。払込用紙に記載された未納分年度、金額をご確認のうえご納入ください。

年会費：一般会員 7,000円、特例会員 4,000円

送金先：口座番号 00190-9-73668 加入者名 幼児教育史学会

今回は該当の会員にのみ振込用紙を同封していますので、それが入っていない会員は完納状態にあります。なお、2017年6月末現在の会費納入状況をもとに請求させていただいております。本状と行き違いでご納入いただきました場合は、何卒ご容赦ください。

3) 会報原稿の募集

会報を通じて研究情報の提供と研究者間の交流に努めています。会員研究情報、新会員の自己紹介（全員の方をお願いしています）、海外幼児教育だより、幼児教育史研究への提言などをお寄せください。文量は3000字程度で、メールまたは郵便で、なるべくデータを付けて事務局までお送りください。年2回の会報発行時までには届いた分を随時、掲載します。次回の会報は2018年2月頃に出る予定です。

4) 所属・住所などの変更届けに関するお願い

変更が生じた場合は事務局までお知らせください。

幼児教育史学会会報 第24号 2017年 6月 30日

発行者 幼児教育史学会

〒112-8610 文京区大塚 2-1-1

お茶の水女子大学 小玉亮子研究室気付

幼児教育史学会事務局

Tel/Fax: 03-5978-5342

E-mail: admin@youjikoikushi.org

郵便振替 00190-9-73668